Euro-NARASIA | SERIAL REPORT〈第十二回〉

飛鳥・奈良と「汎ユーラシアのイラン文化」

AOKI Takeshi
青木健

15 中国新疆ウイグル自治区に於けるゾロアスター教・マニ教遺跡（ウルムチ・トゥルファン篇）

今号からは、２０１７年８月に実施した中国新疆ウイグル自治区のゾロアスター教・マニ教遺跡の調査が主題となる。最初に全体の旅程を示すならば、

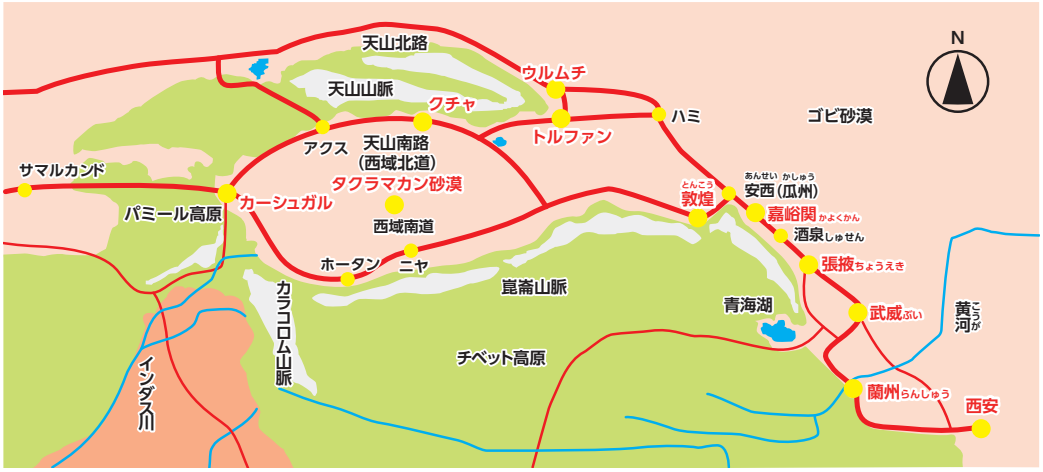
ウルムチ⇓トゥルファン⇓敦煌⇓西安

と、あくまでイラン系文化の視点にこだわって、シルクロードを「西⇓東」の順に進んだ。前号で示したように、サマルカンド、タシケントから天山山脈の北側に抜け、そのままキルギスを経由してウルムチに到着したのである。往年のシルクロードに即して説明するならば、天山北路・天山南路・南路（次頁の地図参照）の３ルートのうち、最も北辺の天山北路を東進している訳である。

イラン系文化の痕跡を辿るとの趣旨からすれば、このルート選択には大いに問題がある。イラン系遺跡の多寡の観点から論じるならば、それらが最も豊富なルートは、

サマルカンド⇓ザラフシャン河を遡る⇓ヤグノーブ渓谷⇓パミール高原⇓カーシュガル

と抜けて、今もって東イラン語を話すヤグノーブ人、パミール人の間に分け入る天山南路だったと思われる。ソグド文化の故地を実感するには、この道しかない。そのまま中国領カーシュガル（喀什）に入れば、そこには中国領タジク人（塔吉克族）と呼称されるイラン系の人々が集住している。これまた、ソグド人が消え去り、ホータン・サカ人が消え去り、トハラ人が消え去った今、新疆ウイグル自治区で最後まで残ったイラン系民族の文化を実体験できた筈である。



ここから、新疆ウイグル自治区西部のアクス（阿克蘇）、クチャ（庫車）を経てトゥルファンまで至れば、現在のところ研究されているシルクロードのイラン系文化のゴールデン・ルートを踏破できたであろう。しかし、残念ながら政治的状況がそれを許さなかった。そもそも、標高５，０００メートル級のパミール高原に攀じ登る体力は、筆者にはありそうに無い。このルートについては、可能性があるようなら、他日を期したい。

＊　＊

❶ウルムチの新疆ウイグル自治区考古学研究所・・筆者はイラン研究者であって、中国には甚だ不案内である。そこで、今回の中国新疆ウイグル自治区の旅では、全面的に奈良県立橿原考古学研究所（以下、橿考研）と奈良県立大学（以下、奈良県大）の方々のお世話になることにした。尤も、悪天候の為に、その計画は当初から甚だしい齟齬を来たしてしまったのだが。

と云うのも、奈良県大の中島敬介准教授と橿考研の川上洋一研究員は、関空から北京経由でウルムチを目指し、筆者は羽田から北京経由でウルムチを目指し、お互いに北京空港で合流する予定であった。しかし、羽田便は順調なフライトを続けたものの、関空便は大阪を台風が直撃しているとかで、著しい遅延を余儀なくされ、結果的に北京空港で合流するどころか、ウルムチまで来ても、奈良県勢の影も形も見えなかったのである。

見ず知らずのウルムチで単独行動を余儀なくされた筆者の不安は、それはそれで貴重な経験であった。イラン系言語はどうにかなるとして、中国語はさっぱりの人間がイラン語文化圏から入華した際の気分は、シルクロードを遥々とやってきた往古のイラン系諸民族に通じるものがあるだろう。自らが異国で異形の存在に成り果て、周囲

に全く同類が居ないと云う恐怖感である・・・できれば、あまり追体験したくない状況ではあったが。

ウルムチでの貴重な時間を空費する訳にもいかず、とりあえず橿考研の菅谷文則所長（２０１７年当時。２０１９年没）の紹介状を頼りに、市内の新疆ウイグル自治区考古学研究所を訪問することにした。ここは研究者しか立ち入れない専門機関と聞くが、応対して下さった呉勇主任に菅谷所長の紹介状を提示したら、容易に入館できた。日中国交回復後の第1期中国留学生だった故・菅谷所長の人脈の恩恵である。

ここで、研究中の出土品を陳列している各フロアを拝見した。

- 于闐（ホータン）の部
- 尼雅（ニヤ）の部
- 楼蘭（クロライナ）の部
- 吐魯番（トゥルファン）の部
- 阿斯塔那（アスターナ）の部
- 亀慈（クチャ）の部
- 喀什（カーシュガル）の部

井上靖の小説の中でしかお目にかかったことのないような貴重な収蔵品を大量に見せて頂き、眼福これに過ぎるものは無かった。中でも圧巻だったのは、２０００年に発見され、研究所の地下室に秘蔵された「楼蘭近郊の小河墓遺跡出土のミイラ群」である。「楼蘭の美女」（後出）のミイラは世界的に有名だが、実際にはかなり黒ずんで損傷が激しい。しかし、小河墓遺跡公主のミイラは睫毛まで生え揃っており、白人系の顔立ちをそっくり残していた（因みに、この両者はしばしば混同されるが、全くの別物である）。紀元前２０００年～１０００年紀の楼蘭近郊に白人が集住していたとは、筆者にとって驚きであった。しかも、ＤＮＡ鑑定の結果、それがイラン系アーリア人でもインド系アーリア人でもなく、遥か彼方の東ヨーロッパ系アーリア人だったとは、予想外である。イラン研究者としては、クチャ～トゥルファンに至る天山南路一帯でヨーロッパ系言語を操っていたとされるトハラ人（？～紀元7世紀頃）との関連を想起せざるを得ない。残念ながら、さすがに写真撮影は禁じられたが。

呉勇主任によると、アメリカから来た或る旅行者は、「２０，０００元（1元は約17円）の大金を払うから、一目この小河墓遺跡のミイラ群を見せてくれ」と申し出たものの、研究所からすげなく断られたらしい。それほど価値の高いものだと云うことのようであった。しかし、贅沢なようだが、暗い地下室でガラス製の棺桶に入った80数体のミイラ群と向き合うと云う経験は、ミイラ自体にどれほど学術的価値があろうと、やはり不気味の感は否めなかった・・・本来、青空と砂漠にだけ属しているべき４０００年前の東ヨーロッパ系白人の遺体が、殺風景な研究所の地下室に安置されて物象化している光景は、砂漠よりももっと荒涼とした

ものであった。

続いて、呉勇主任には、小河墓遺跡群の墓標を見せて頂いたのだが、これに関する意見を求められてしまい、かなり難渋した。何でもこの小河墓遺跡では、男性の遺体の埋葬地点には女性性器を象った墓標を立て、女性の遺体の埋葬地点には男性性器を模した墓標が立てられていたのだそうである。確かにそれ自体は奇抜な謎だと思うが、私に「専門の考古学者として、どう思いますか？」と尋ねられても、「普段はペルシア語の文献を読んでいます」としか答えようが無く、けれども紹介状には「奈良県立橿原考古学研究所からの来訪」と記してあった筈で、「その当人は、今頃北京からウルムチに向かっています」とも言えずで、冷汗三斗であった。大伴坂上郎女ではないけれど、

「ウルムチの　街にしあれば　風流（みやび）無み
　吾がするわざを　とがめたまふな」

である。

これ以外にも、新疆ウイグル自治区各地からの貴重な出土品（しかも研究中）を拝見し、滞在２時間半ほどで新疆ウイグル自治区考古学研究所を辞した。とても全部は見切れない中、少なくともイラン系と思しき遺物についてはメモしたので、筆者の今後のシルクロード研究にとって非常に有益な訪問となった。

＊　　＊

❷ウルムチの新疆ウイグル自治区博物館

・・・然る後、午後からは、またも菅谷所長からの紹介状を携えて、新疆ウイグル自治区博物館を訪問した。とりあえず、郭金龍主任に自己紹介し、案内を乞うたものの、ここは観光客も千客万来の公設博物館であって、特に案内を必要とすることは無かった。一応、漢字さえ読めれば、４万点に及ぶ展示品の大意は掴めたのである。

新疆ウイグル自治区全域から蒐集された貴重なコレクションは、全て一般公開されているので、凡庸索漠、砂を噛むが如き筆者の筆によって詳説するには及ばない。ただ、今回は行けなかったウルムチ以西―特にクチャ、ホータン、カーシュガル―に関する展示品は、随分と参考になった。仮に現在これらの地に行ったところで、イラン系住民の姿は既に無く、現在ではトルコ系住民にとって代わられている。想像の中での新疆ウイグル自治区西部のイラン文化を巡る旅となった。

先述の新疆ウイグル自治区考古学研究所との対比で、一点だけ展示資料を取り上げるとしたら、１９８０年に楼蘭鉄板河遺跡から出土した「楼蘭の美女」のミイラが重要である。このミイラは、小河墓遺跡の美女と同様に、紀元前２０００年紀に楼蘭周辺に住んでいたとされるもの。前者が東ヨーロッパ系の血統を引くアーリア人であったのに対し、こちらは、父系で北欧系の血を引くアーリア人である（尤も、母系では

東アジア系の黄色人種だったらしいが)。今から４０００年近く前に、ヨーロッパ系白人がタクラマカン砂漠の東端に現れた痕跡を目の当たりにする機会を持てたことは、研究者としてこの上ない奢侈であった。

＊　　＊

❸ウルムチの国際大バーザールと中国の現存イラン系民族・・・斯くするうちに、奈良県勢から連絡が入った。私としては、今晩ウルムチに到着予定の彼らを空港まで出迎えに行くべく身構えたのだが、何と「関空から北京空港までは来たものの、そこで悪天候の為に再度足止めされている」との悲報だった。これでは、何時ウルムチに到着するやら、皆目見当もつかない。

新疆ウイグル自治区の調査日程がどんどん遅延していく状況に頭を抱えていると、頼もしいことに、寧夏文物考古学研究所副研究員の馬暁玲さんが合流してくれた。彼女は、新疆ウイグル自治区とカザフスタンの国境の街「塔城」のご出身。もう数キロ北で生まれていたら、中国人ではなく、カザフスタン人になるところであった。漢民族にして且つイスラーム教徒でもあると云う方である。２０１６年８月から２０１７年６月まで橿原考古学研究所に留学しておられ、筆者はこの間に彼女との面識を得た。これで、言葉の面での負担は、大幅に軽減された。

筆者としては、何時到着するとも知れぬ奈良県勢をウルムチで待つよりは、トゥルファンまで先行すべきではないかと思ったのだが、馬さんによると、トゥルファンのマニ教遺跡に足を踏み入れるには、新疆ウイグル自治区文物局の許可が必要だとのこと。而して、橿考研の川上研究員が、菅谷所長から新疆ウイグル自治区文物局宛ての紹介状を持参しており、氏を待たないと、トゥルファンに先行しても意味が無いとの説明であった。

＊　　＊

止む無く翌日は、奈良県勢を待つ間に少しでもイラン学の知見を広めるべく、ウルムチ市内の国際大バーザールを訪問して、各民族の物産を拝見した。少し古いが、２０００年の統計によると、新疆ウイグル自治区には、

- ✓ ウイグル族：８３４万人
- ✓ 漢民族：７４９万人
- ✓ カザフ族：１２４万人
- ✓ 回族：84万人
- ✓ キルギス族：16万人
- ✓ モンゴル族：15万人
- ✓ タジク族：４万人
- ✓ 満州族：２万人
- ✓ 白系ロシア人：９０００人

など、合計56の民族集団が存在する。この中で、最も筆者の関心を惹くのは、嘗て10世紀の頃まで新疆ウイグル自治区全域に

住み着いていたイラン系民族の最後の名残とも言うべきタジク族である。

この「タジク族（塔吉克族）」との名称は、中国政府が斯く名付けたまでであって、実態とは少なからず乖離している。と云うのも、そもそもタジキスタン自体の民族分布が複雑で、西イラン語の末裔たるペルシア語（イランのペルシア語とは微妙に違う古風なペルシア語）を話す平野部のタジク人と、東イラン語の末裔たるパミール語を話す山岳部のパミール人に二分されているのである。両者が住まう国家の名称が「タジキスタン」である以上、パミール人をタジク人の名称の下に一括して呼称して可とする立場もあるかも知れぬが、厳密に言えば両者は別である。

而して、新疆ウイグル自治区の最西部に住むイラン系民族は、タジク人ではなくパミール人である。近年の学説に拠れば、ゾロアスター教の教祖ザラスシュトラ・スピターマはパミール高原の出身かも知れぬとされており、筆者はこのパミール文化に重大な関心を寄せている。中でも最大の関心事は、中国領のパミール人―サルカーリー族―が既にイスラーム化しているのか（タジキスタンのパミール人はイスマーイール派イスラーム教徒である）、或いは古代の古俗を残しているのかにあった。しかし、残念ながら大バーザールは御土産物が主であって、彼らの日用品などは扱っておらず、中国領パミール人の習俗を推察するに足る資料は入手できなかった。このまま時日が経つと、中国領パミール人はイスラーム化するか漢化するかのどちらかの道を辿るとしか思えず、できることならここで何らかの資料を入手したかった。

＊　＊

❹トゥルファン・マニ教遺跡の調査許可証・・・中国滞在2日目の午後に、奈良県勢からの第2報を受信した。それによると、昨日北京発の中国国内便は大部分が欠航になってしまい、北京空港は足止めされた中国人民で足の踏み場もないほどだったという。そんな中、2人のうち川上氏だけが、北京発ウルムチ着の代替便の航空券を1枚だけ確保したとのこと。とりあえず川上氏が先発し、そろそろウルムチに到着予定との確報を得たので、これを待ち、夕刻にやっと合流出来た。

ここで、菅谷所長の旧友で新疆ウイグル自治区文物局副所長の李軍氏にホテルまで来て頂き、川上氏持参の紹介状を見せて交渉した。その結果、これまた紹介状が素晴らしい効果を発揮し、無事に希望する5ヶ所全部の立ち入り許可を頂戴した。その5ヶ所のマニ教遺跡とは、

- 高昌故城K遺跡
- 高昌故城α遺跡
- ベゼクリク千仏洞第38窟
- 勝金口北寺3号遺跡
- 吐峪溝遺跡

である。アクシデント続きではあったが、これでトゥルファン・マニ教遺跡への道が拓かれた訳である。早速、ロスした時間を取り戻すべく、20：00近くになってからウルムチを出発し、一路トゥルファンを目指した。

といっても、北京時間で統一されている中国の最西部に位置する新疆ウイグル自治区では、まだ日も明るく、体感的には日本の16：30くらいの印象である。車窓から目についたのは、無数の風力発電の風車だった。トゥルファン盆地はタクラマカン砂漠の最北端に当たり、海抜高度がマイナス１００メートル以下の盆地である。当然、周囲から吹き込む風が凄まじく、風力発電にはもって来いなのだそうである。そこで中国政府は、デンマークから数基の風車を輸入して試した後、夏のトゥルファン盆地の膨大な発電量を賄うべく、中国製の風車を数百基単位で設置しているらしい。４～10世紀にシルクロードの要衝だったトゥルファンは、今では風力発電の要衝と化していた・・・まさに今昔の感がある。所要３時間（１８０キロ）のドライブの果てに、22：30にトゥルファンに到着。流石に日も暮れてしまい、人口30万人の現代トゥルファンの街並みは確認できかった。

＊　　＊

❺トゥルファン博物館訪問・・・中国滞在３日目の朝、昨晩のうちにウルムチ空港に到着した奈良県大の中島准教授も、夜を徹する移動の果てにトゥルファンに到着しておられた。関空で足止めされ、北京空港で足止めされ、ウルムチに到着するや否やそのままトゥルファンまで飛ばして来られた訳で、大変なご足労であった。こうして、調査メンバーも揃ったところで、昨日李軍氏から頂戴した紹介状を持参の上、トゥルファン博物館へ赴いた。

写真１　トゥルファン博物館共産党幹部記念撮影
（左から、馬暁玲さん、中島氏、筆者、王霄飛氏、中国人スタッフ4名）

手続きの筋から言うと、新疆ウイグル自治区文物局副所長の李軍氏の紹介状を、トゥルファン文物局長で共産党組副書記の王霄飛博士に提出し、その承認を得た上で、初めてトゥルファン・マニ教遺跡への扉が開かれるらしい。広い会議室に通されて、調査の趣旨を説明し、王局長と記念撮影して（写真1参照）、無事にマニ教遺跡への立ち入り許可を得た。中国での調査は、中央アジア諸国とは異なり、斯くの如くにややこしい手続きを踏まなくてはならない。

その後、1～2時間ほど、薄瑪瑙色の室内灯の中で博物館を見学し、トゥルファンの遺跡に関する予備知識を仕入れたのだが、マニ教遺跡しかないと思っていたトゥルファンで、思わぬゾロアスター教遺跡の展示に遭遇した。即ち、交河故城の東南から発掘された康氏一族の集団墓地に関するコーナーである。具体的な場所については、博物館の展示プレートをご覧頂きたい（写真2参照）。

交河故城と言えば、100を越える仏塔で有名な仏教遺跡である。仏塔林立する古城の中に、明らかにサマルカンド出身のソグド人一族である康氏のゾロアスター教集団墓地が営まれているとは、神韻縹渺たる幻想美を感じさせる光景である。墓誌（写真3参照）によると、魏晋南北朝期の6世紀末のものだそうである。6世紀と21世紀を直に結ぶ遺跡に遭遇しようとは、研究者にとっては見神の域に達するほどの歓びである。

写真2　トゥルファン康氏一族墓地位置

写真3　トゥルファン交河故城の康氏一族の墓誌

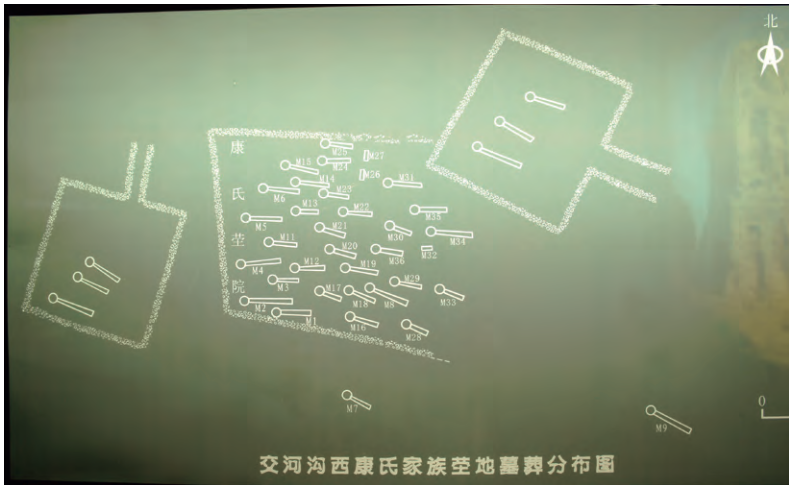


写真４　トゥルファン康氏一族墓地詳細

筆者としては、その影に、アフラ・マズダーの姿を期待したいところであった。

しかし、展示方法がよく分からなかったのだが、集団墓地の詳細図（写真４参照）を見る限り、埋葬地点が人体の姿で描かれており、土葬していたとしか判断できない。しかし、博物館の展示としては、その隣にゾロアスター教特有の納骨器（写真５参照）が置かれており、どう見てもこれが康氏の墓所から発掘されたと主張しているようにしか見えない。これは、現地の発掘跡を確認するしかないだろう。

而して、午後から故城へ向かおうとするも、正午の気温の余りの暑さに、外出自体を断念せざるを得なくなった。何と、この日のトゥルファンの最高気温は45℃もあったのである。筆者は、火焔山から吹き付ける熱風を毛髪で感じる始末で、クラクラしていたところであった。明代に「火州」と称した名称は伊達ではない。ともかくも、これでホテルの部屋にクーラーが２つも設置され、夏季のトゥルファンで膨大な電力が消費されている理由が分かった。調査は、日が暮れてから出直すしかない。

写真５　ゾロアスター教の納骨器

あおき・たけし｜1972（昭和47）年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、慶應義塾大学言語文化研究所兼任所員を経て、現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教史』（刀水書房）、『マニ教』（講談社選書メチエ）、『古代オリエントの宗教』（講談社現代新書）など著書多数。

玉門関（敦煌）：「華」と「戎」の境界であり、異文化交流のゲート　（撮影：中島敬介）